作成：2018/01/08　長井

蔵前-関西午餐会メモ

平成 30 年 2 月 6 日(火)　12 時～14 時 30 分　　大阪中央電気倶楽部 317 会議室　　出席 25 名

----------（HP 掲載の内容）----------

月例講演

２．講演

講師：　北野利男 氏（（S37　繊維卒））元 東洋紡

演題：　山を巡り、山に学ぶ』…山の大自然と歴史を訪ねて

繊維工場の自動化オートメ化推進業務からの退職後、地元須磨山から好きな登山を周辺歴史と自然観察を含めて再開した。さらに、国内の百名山・二百・三百と対象を広げ、海外の有名峰まで、たいへん数多くの峰々を踏破している。

【まとめ】

山の風物と山登りを、何よりも愛する講師のそのルーツは故郷-伊奈の中学生時代にある。木曽駒ヶ岳をはじめ、4 座の 3000m を愛し、大学時代まで繰り返しの登山で山の魅力を満喫した。自然の恵みと歴史学を傍らに健康と英気を享受できる山登りは、講師の日常で最も価値と意味のある趣味となっている。登山の歴史とあちこち山々の醍醐味を解説した講演は、その危険性予防策で、メめられた。高齢者登山ブームが 健康増進に資するよう留意して取り組みたい。

【Ques. ＆ Ans. 】

Q1：アーネスト サトウ」は どのような人ですか？

Ans：イギリス人外交官。「サトウ」はスラブ系の名前です。

Q2： 高所での恐怖感はありますか？例えば、須磨アルプスの門渡りに、手すりナシであるが？？

Ans： 恐怖症ではないが、怖いところはそれなりに怖い（恐怖感あり）。

Q3： 大山縦走路、現在どうなっていますか（昔に行った経験あるが、最近は未詳）？ ？

Ans： 現在は「崩れ」が激しく、通行禁止である（個人として行く人はあるようだが）。

山を巡り、山に学ぶ　人生最終章

話題提供 北 野 利 男

山の魅力「なぜ 山に？」（私見）

・ひと言で云えば　⇒「好奇心」

・達成感 を味わう　⇒ 自己満足

・神秘的な未知の体験「冒険心」

・自然や史跡の写真取材をする

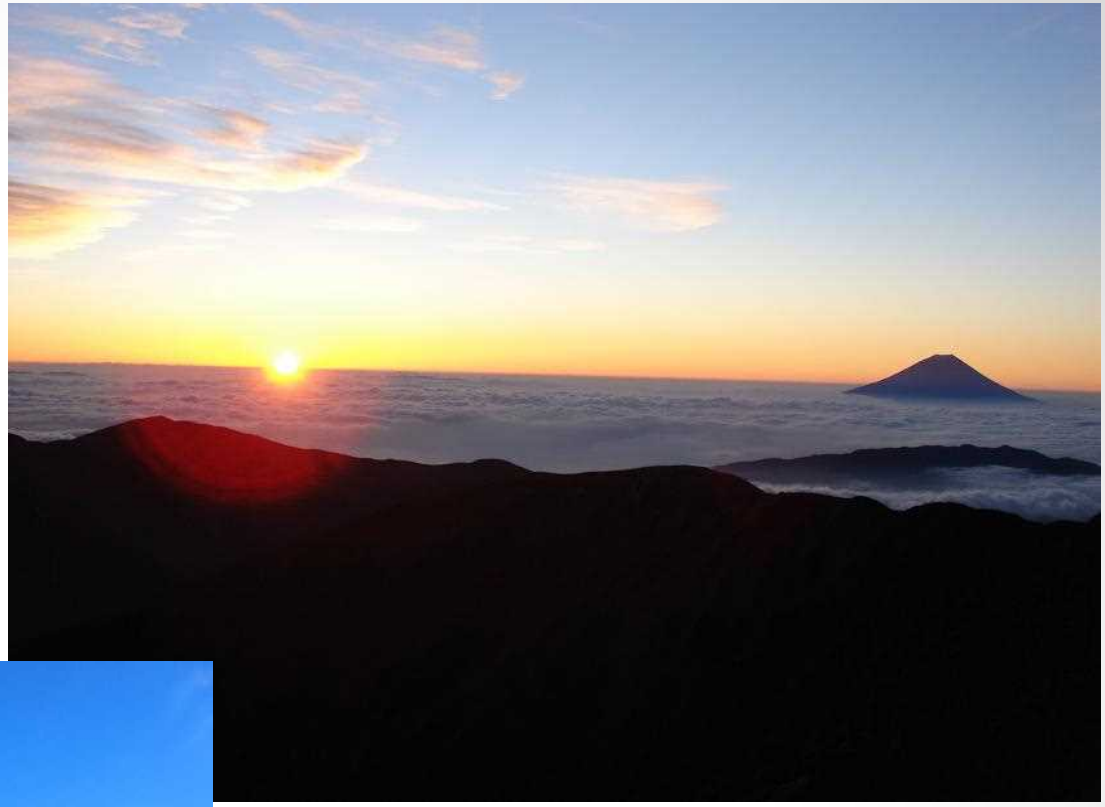
・生命の原点とか、神仏を想う

・心身の 健康診断 と 健康増進

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「じいちゃんは どうして山に 登るのと
訊ねる幼を 山に連れゆく」

山の魅力 -- 風景



南ア、荒川岳にて

北ア、涸沢より

東北・朝日連峰にて

私の「山歴」

・出身は、長野県伊那市（中央アと南アの間、伊那盆地）
　百名山3000m級 4座 (朝日に光る木曽駒ヶ岳・空木岳
　及び夕日に輝く甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳) を仰いで育つ。

・中二の時木曽駒ヶ岳登山。　その後周囲の山へ。
・高校、大学時代、身近な友人に山岳部長がいた。
・社会人時代、盆休みなどに先輩・同僚と北アへ。
・退職前、山好きを誘って「やまなべ会」を結成。
　「山に登り鍋を囲もう」がモットー、25年間に例会241回超

・退職後、百名山を2006年、家内も6年後に達成。
・兵庫100山2013年、関西百名山を2014年に達成。
・その他、残りの都道府県最高峰を2015年に完登。
・花の百、日本二百、三百名山は共にほゞ９割達成。
・海外は富士山以上を８座。　毎朝登山 6000回超。

退職後の山歩き

日本人はいつから「登るようになったか？」

狩猟採取から自然崇拝へ

・日本は豊かな山国、日本人は「山の自然」と共に生きてきた。
「狩猟採取」は太古から現代まで続く。但し「登山」ではない。

・農耕が始まると「水源の山」に感謝し、「災害の山」に祈った。
数多の自然の恵みに感謝し、多くの災害の根源の山を恐れ祈った。
大きく 美しい山を⇒神の籠る山、神奈備山、神体山と崇めた。

・自然の象徴たる「山」を人知を超えた「神」とし、畏敬の念で、
感謝・尊崇・慰霊の意を表わすため祭を行い、山上に祠を祀った。
崇拝対象を個々の「自然」にも求めた結果、八百万の神が生じた。

・仏教が入り、神仏習合の修験道により、行者達の登山が始まる。

・宗教家による開山。富士山、白山、立山、御嶽山等への講参拝。
石鎚/大山や、播隆上人の「槍ヶ岳開山」等で修行登山が大衆化。

美しい　山の風景

鷲羽岳より

仙人池にて

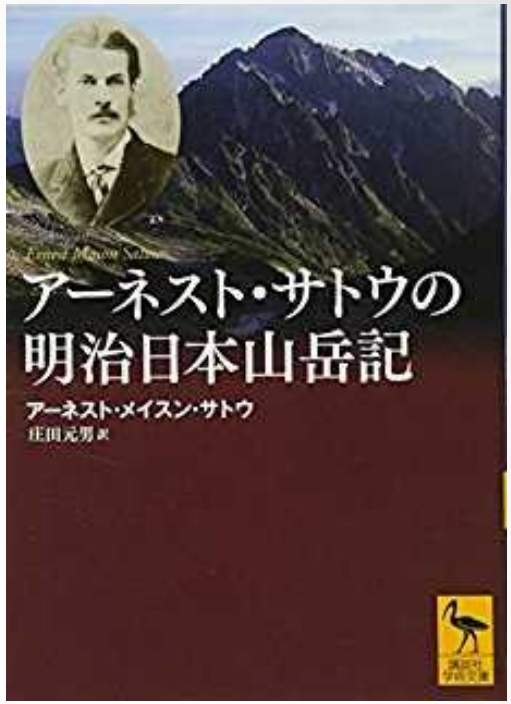
「登山」も外国人から学んだ

外国人から学んだアルピニズム

- 1862（文久2）年、アーネスト・サトウ：英公使で通訳、日本の山を歩き廻り、日本アルプスの名づけ親とされる。幕末史に多出。
- 1888（明治21）年、ウォルター・ウェストン：英人宣教師、上條嘉門次との友情、「日本アルプスの登山と探検」イギリスで出版。
- 1868（明治元）年、アーサー・ヘスケス・グルーム：英人貿易商、元グラバー商会、紅茶貿易、ホテル業、別荘開発、明治30年代に日本初の「神戸ゴルフ倶楽部」、毎日登山の元祖、「六甲山開祖」
- 欧米人の山登り（レクリエーション）を見倣って、市民は身近な趣味の登山を始める。大正期「神戸ヒヨコ登山会」創設、95周年。
- 近年の登山ブームでは、心身の健康のための登山が一般的に普及。登山用品の大衆化、ツアー登山、高齢者、山ガール、山の日制定。

日本の山を愛した
最初の西洋人

アーネスト・サトウは、英外交官、通訳、ライター、「日本アルプス」の名付親



サトウの次男
武田久吉は

英国留学、植物学者、京大・北大講師

日本山岳会設立へ、第6代会長

ウェストンが紹介した
日本アルプス

グルームが拓いた

六甲山

市民の山 六甲山

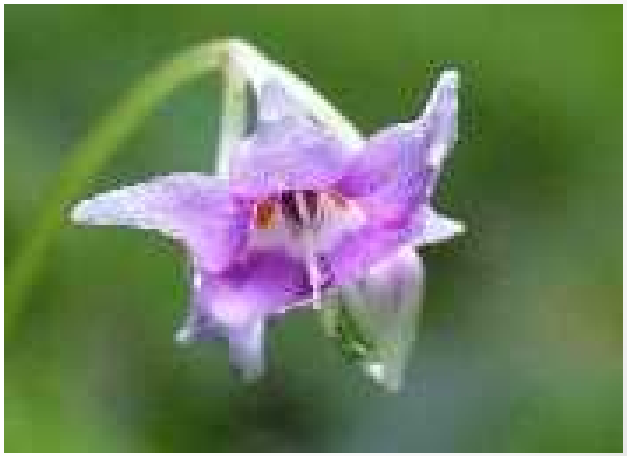
グルーム祭

- 六甲山の緑化
- 毎日登山運動
- 全山縦走大会
- 多くの登山会

高嶺の花の魅力 -1

レブンアツモリソウ

エゾノツガザクラ と チングルマ



イワタバコ

ヒマラヤの山の神仏

ストゥーパ　仏塔

カンニ　仏塔門

タルチョ
祈祷旗

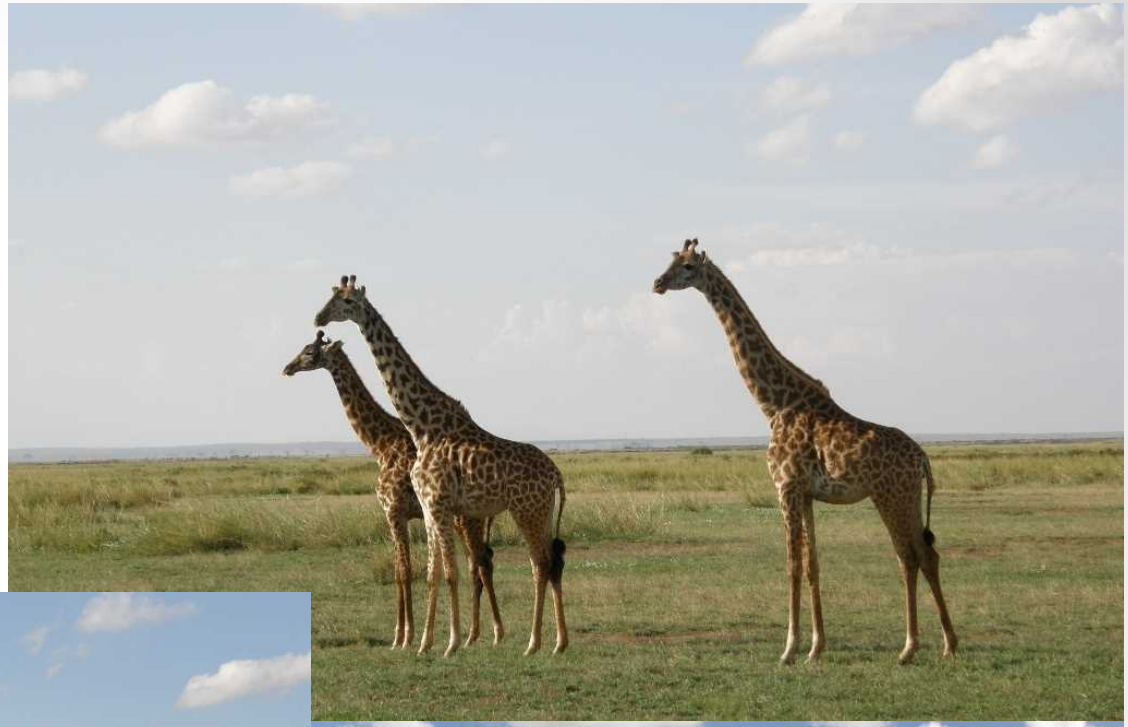
ガンガプルナ峰と小規模な氷河

7～8000m峰と最大規模のゴジュンバ氷河

ケニア、タンザニア

キリマンジャロ

5895mへ



アンボセリ国立公園

マサイ族の踊り

キリマンジャロ

5895m　頂上

ボリビア・アンデス　6008mへ

首都ラパスの街

ウトゥルンク峰

登頂　6008m

山を巡り、山に学ぶ　～ 人生最終章 ～

北 野 利 男（S37 卒）

1. 退職後の生き甲斐さがし

17 年前 63 歳で退職し、有り余る自分の時間を目の前にして、さて何を生き甲斐に余生を楽しもうかとルート探しを始めた。二年ほどの間、専門学校の講師のまね事をしたり、英会話やエッセイ教室で苦手に挑戦してみたが、楽しさからは程遠く続かなかった。その後、しあわせの村にある「神戸市シルバーカレッジ」という 57 才以上の学校を知り、環境問題など三年間学んだ。ここでは課外活動が多彩で、私にとって目を見開らかされることが多かった。勉強も面白かったしクラブ活動で挑戦した短歌や、ボランティア活動での歴史ガイドなどのグループ活動で交友関係が拡がった。同窓会活動は活発に続いている。

初めて試みた短歌は今も惰性で続けているが進歩はない。元もと興味があったのは登山と歴史や地理で、これは趣味として外せないとの思いに至った。歴史は以前から愛読していた司馬遼太郎作品と、地域の歴史研究グループにより啓発された。絞り込んだ趣味の優先順位として、「登山」、「歴史」、「短歌」、「史跡ガイド」に落ち着いて今に至っている。

3 年間通ったキャンパス

「須磨の関守」の歌碑

離宮公園の噴水とバラの庭園

2. 歴史探索とボランティア

住んでいる地域が、歴史に何度も登場した神戸の須磨であることから「NPO 法人須磨歴史倶楽部」という会に所属して、素人ながら調べたことを市民講座などで話したり、依頼を受けて「史跡めぐり」のガイドなど、ボランティアで社会奉仕らしい事をやっている。因みに、須磨の地が歴史に登場するのは万葉時代からで、「玉藻刈る」とか「藻塩焼く」など塩づくりの歌が詠まれている。奈良時代には「須磨の関」があった。須磨は摂津の隅であり、畿内の隅でもあるため「スミ」が訛って須磨になったともいう。配流の地の印象があり、重罪の場合須磨を越えて畿外に流されたが、罪が軽かった在原行平は平安時代初めに二年程須磨で蟄居してロマンスを残した。「源氏物語」でも須磨の巻に関しては行平をモデルにしたと思われ、主人公の光源氏が謹慎のため須磨へ来たとしている。平安末期には「源平一ノ谷の合戦」が行われ、「平家物語」に描かれ、義経・直実・敦盛・忠則・重衡らが登場した。南北朝時代の「太平記」にも足利尊氏らが描かれている。

須磨はかつて白砂青松と秋の名月など、歌枕の地として都人の人気を呼び、和歌に、謡曲に、俳句に詠まれ続けた。江戸時代には芭蕉・蕪村・良寛等の文人墨客が訪れ作品を残し、明治の半ばに正岡子規が一ヶ月間療養生活をして 67 句を残した。句碑なども沢山建っている。明治

後半には、住友家を筆頭に大阪・神戸の大金持ちが豪壮な別荘を競って建てた。中でも最大の別荘？は皇室の武庫離宮で、現在「須磨離宮公園」になっている。大正期に文豪・山本周五郎が処女作「須磨寺付近」を書いたのもこの地だった。海水浴場と須磨アルプスは昔ながらで自然に親しむ場を提供している。神戸市主催の六甲全山縦走大会は、須磨浦から宝塚までの56kmを一日で歩く名物行事となっていて、全国から毎年数千人が参加し心・技・体を自己診断する絶好の場として人気を呼んでいる。

毎朝登って拝む朝日

須磨寺境内から見る三重塔

史跡ガイド中。雨の風情？も語る

3. 山の魅力と執着

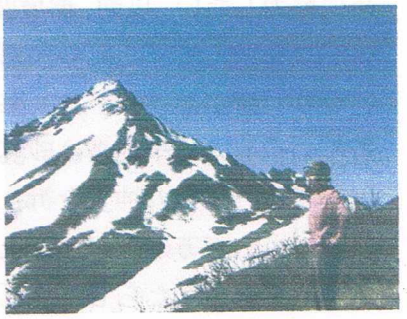
登山と言うほどではないが退職の翌朝から通勤に代わって始めたのは、妻が以前からやっていた「毎朝登山」で、朝起きるとすぐ往復一時間足らずの裏山（六甲山系最西端の須磨の山）へ登って、海の向こうの金剛山や浦山の自然を眺めたり、日の出を拝んだりして帰る。朝食がとても旨い。今や雨の日も風の日も生活習慣となっている。山上で記帳して帰ると当番が集計してくれるルールで、二年ほど前には五千回の節目を超えて神戸市から表彰を受けた。目指すは一応？一万回。遠くの山歩きでは、日本百名山を十年前に完登し、三年前には、関西百名山と兵庫県百山を完登した。47都道府県の最高峰をすべて登ろうという物好きな目標を勝手に立て一昨年達成した。最後に残っていたのは千葉県の愛宕山408mで、最も低い県最高峰の山だ。20分も歩けば登れる山なのに躊躇していたのは、山頂部が航空自衛隊の通信基地になっていて、隊員様に引率して貰う必要があったからだ。登れた日は偶然十二月八日だった。もう一つ偶然が重なったのは、その数ヶ月前に台湾の玉山3,982m（昔、日本一だった新高山）に登り、その時「ニイタカヤマノボレ一二〇八」の暗号電報で始まった真珠湾攻撃のことを思い出したが、今度は開戦を断行した日に航空自衛隊の山に登った事が奇遇だった。引率してくれた若い隊員にこの話をしたが通じなかったので「トラトラトラ」も口にするのは控えた。

私の登山歴は中学時代に始まっている。山岳部に所属したことはないが高校でも大学でも、そこの山岳部長との付き合いがあり山の魅力を共有した。会社時代はお盆休みなどを利用して年に一度、先輩や同僚と北アルプスへ登るのが楽しみだった。５０代半ばからは余暇の山登りを目的に、会社の同僚を中心に「やまなべ会」という会を結成した。“山に登って鍋を囲もう”という趣旨の気楽な会で、20名ほどの会員が幹事当番制でほゞ毎月例会を催している。しかし、登れる山がだんだん低くなって来たのがちょっと寂しい。私が退職後に新たに入会し活動中の山の会は「神戸ヒヨコ登山会」、「神戸市民山の会」、「兵庫県山岳連盟」などがあり、これらも毎月例会を催している。明治のむかし六甲山を拓いた英人グルームら、居留地の西洋人たちがレクリエーションとしての登山の効用を教えてくれた。これを真似て、かつ謙遜してヒヨ

コの名を冠したのが「ヒヨコ登山会」で大正11年から今や96年の歴史を誇っている。会員数は現在700人ぐらいで活動している。

山で鍋を囲む“やまなべ会”

山上で無邪気に喜ぶ山仲間



最北の百名山“利尻岳”へ

4. 次なる山の目標は？

最近NHK-BSで田中陽希君による「グレート・トラバース」では、百名山、二百名山の人力踏破一筆書き巡りの健闘ぶりが放映され人気を呼んだが、私もスローペースながら二百名山・三百名山、花の百名山などで未だ残っている山を巡っている。何れも八割以上登った。完登は絶対に無理だと思っているが、今はとりあえず、総て九割以上を目標にして独り大自然に浸り楽しみながら、のんびりコツコツ歩いている。残っている山が東北・北海道に多く遠いことが悩みの種になっている。家内もよく一緒に登ったが、六年前に本人も百名山を達成して今はスローダウンしている。

山の魅力は経験しないと伝わらないようだ。だから飽くまでも「山は自己満足」だと思っている。心身に健康をもたらしてくれる「山」には感謝と敬虔な気持ちで接したい。歳と共に落ち着いて、慎重な山歩きが身に付き、安全登山が出来るようになったと感じている。神戸市消防局から「グリーンパトロール員」を拝命して、山の環境・安全・防災に協力せよとの事で、六甲山は背筋を伸ばして歩くことにしている。先日、「山を守る指導委員」として過分の市長表彰を受けた。大して貢献もしていないのに、まさか自己満足で趣味の山好きが褒められるとは思わなかったが、改めて気を引き締めて協力したい。全国どこの山でも。

黄葉に覆われた林間を歩く

紅葉と初冠雪の景色は格別

劔沢の大雪渓を延々と進む

5. 尽きない山の深さ

先年、8月11日は「山の日」と制定され、好きな「山」が見直されたようでうれしい。海外の山を歩いても日本ほど潤いのある緑豊かな山はない。四季の彩りや実りをもたらす山、きれいな水を育む山がふんだんにあるのは日本だけだと思う。六甲山も明治の始めは薪採りのため

禿山同然になっていたが、植林を懸命に続けて百年余、今や自慢の青山となった。先人達の努力の賜物である。日本の山の素晴らしさを理解し、みんなで守ってゆくべく子や孫の世代のために協力したい。以前、環境関係の国際会議があり、外国人メンバーを布引の滝に案内した時、皆が口を揃えて「こんな大都会の、新幹線の駅から十分も歩かないうちに、緑豊かな深山幽谷となり、滝があり湖があり海が見える。世界のどこにもありません！」と感嘆されたと聞く。近年の世界の紛争地帯は砂漠や禿山が多く、潤いの無い地域だと思う。山の恵みが少ない処ほど天なる「一つの神」を祈り、或いはその神を互いに奪い合っている様に思える。緑豊かな我が国には八百万の神が、天上だけでなく山も岩も木も滝もそれぞれに憑いて居て、感謝しつつ祈れば恵みをもたらしてくれると日本人は考えた。多くの仏も癒してくれている。修験道も山の神仏に感謝する心から始まったと思われる。

山は何度登っても「一期一会」の如くその都度、季節や天候の変化で山の装いも変わり、自分の気分も変わり新たな「山」に出会える。オーバーだが、修行僧のような心境で山を歩いている自分に気付く。毎年夏休みには子や孫たち家族全員を連れて、優しい百名山を選んではみんなで登るのが楽しみで、いつしか十一座目となった。一番上の孫娘が小１のとき富士山に連れて行ったのが最初だった。その頃の短歌に、

「じいちゃんは どうして山に 登るのと 訊ねるおさなを 山に連れゆく」

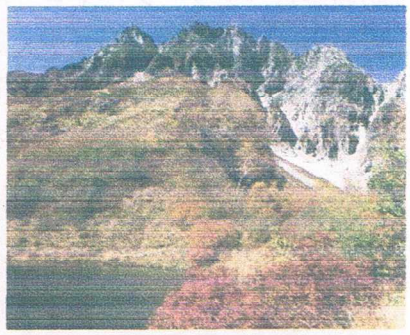
高い山に登って周囲を見渡しながら、地球環境やその地方の歴史風土、以前登った山の確認と今後登りたい山など吟味するのは無上に楽しいひと時だ。行き帰りにはその地方の史蹟や名所に立ち寄り、カメラ取材するのも楽しみだ。昨年、奥只見の二百名山・守門岳などに登った時、思いがけず司馬遼太郎の「峠」所縁の“八十里越”に近い山中に「河井継之助記念館」と墓があるのを知り感動した。長岡から会津へ援けを求に行く山中の峠である。

継之助の辞世の句「八十里 こし抜け武士の 越す峠」を踏まえて一首詠んでみた。

「八十里 “峠”見下ろす 守門岳に 最後の武士の 呻く風鳴る」

白馬から雪倉岳・朝日岳へ

東北の山の名花・ヒメサユリ



秋の奥又白池からの前穂高岳

6. 海外の山での体験

海外の山は、日本にない高さと厳しさが魅力で、数年前までは時々登ったが今は経済的、体力的に自粛している。五千米以上の登った山は、ネパール・ヒマラヤのゴーキョピーク 5360m、アフリカ最高峰タンザニアのキリマンジャロ 5895m、ボリビア・アンデスのチャカルタヤ 5395mとウトゥルンク 6008m等だが、何れもトレッキングとしての登山で、現地ガイドやポーターのお陰で登ることが出来る。心配なのは高山病だが高度順応させながら登ってゆく。珍しい観光が出来たことも楽しい思い出となっている。例えば、エベレストを始め八千米級の鋭

い白峰に囲まれて息を呑んだこと。ケニアのアンボセリ国立公園では、象など多くの野生動物の中で写真を撮りまくったこと。アンデスではウユニ塩湖で神秘的な光景に出会ったり、インディオなど原住民は我々と同じモンゴル系で、子供のお尻に蒙古斑があると教えてくれた現地ガイドにも親しみを覚えたことなど。

村の入口には厄除けの仏塔門が

高峰の前に、大氷河と氷河湖

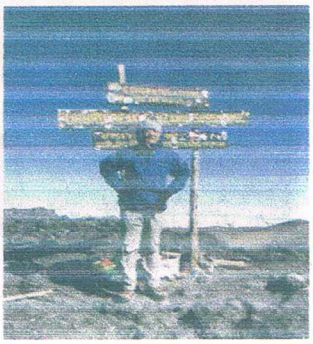
下山してヒマラヤを背に一息

ヒマラヤでショックを受けたことがある。それは、幅 1km 長さ 16km のネパール最大のゴジュンバ氷河を見た時、色が白くなくネズミ色をしていた。よく見ると土砂が拡がっている川原のようだ。本来の白い氷河が小石や土砂に覆われているのだ。深刻な問題が潜んでいることが分かった。欧米の氷河は冬に雪が降り白く氷雪を積み重ねるが、アジアの高山は冬は乾期で雪も降らず、夏が雨季で高山には雪が降って氷河が形成されて来たが、地球温暖化により夏の雪が雨に変わることが多く氷河を解かしてしまう。その結果氷河の表面は白くならず、飛んできた土や石で覆われたまゝとなる。このグレイの氷河は熱を吸収しやすく更に氷河を解かす。こうしてヒマラヤの氷河は急速に縮小し、代わって氷河湖が増えている。氷河湖のダム堤は主に氷で、これも解け易い。決壊すると下界は大洪水になる。また万一ヒマラヤ氷河の減少が進むと、揚子江やガンジス河などアジアの大河の水が細り、地球的規模の食糧危機が心配される。これは杞憂ではないとして、日本からも学者達が現地で多角的な調査をし、警告を発している。

キリマンジャロには赤道直下ながら氷河があり、映画「キリマンジャロの雪」を思い浮かべるが、いま氷河はかなり小さくなっていて見る角度によっては下から見えにくかった。それでも断面が数十米もある氷河の傍を歩いて圧倒された。

子象を庇いつつ行進する象の大群

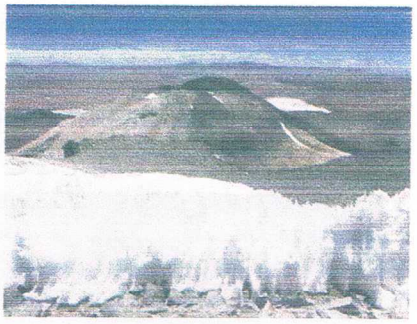
赤道直下の氷河だが縮小中


キリマンジャロ頂上で

アンデスの 6008mの山頂は氷河を期待したが大きな氷塊程度だった。最近、日本の山でも「剱沢大雪渓などが氷河である」という説が出たが、これも縮小しつつあるようで残念だ。山愛好家は環境保護派であり深刻に思っている。

ウユニ塩湖,これを車で渡った

私の生涯の最高峰 6008mへ



ボリビア・アンデスの小氷河

7. 安全な登山のすすめ

山での遭難など他人に迷惑を及ぼすことは、最も不名誉なことで協力し合って防がねばならない。近年、高齢者の山の事故が増えている事が強調されている。少子高齢化と退職年齢上昇により高齢登山者の比率が上がり事故件数も増えているが、全登山者に占める高齢者事故率が増しているとは思えない。安全策を追求して鍛錬を心がけ、情報を集めて計画を練った上で気持ちよく歩きたい。経験を積んだ高齢者は、落ち着いて安全登山ができる筈だ。昔のベテランも登山を再開する時は、初心者として謙虚に歩き始め、やがては山の良き理解者、指導者になる事を目指して欲しい。慣れないうちは講習を受け、山の会やツアー登山に参加して最新の登山マナーや技術習得を積みたい。山岳救助保険加入も大切なことだ。800 万人に及ぶという登山愛好家は、健康増進による医療費節減に寄与したい。

以前から「健康だから山に登るのではない、山に登るから健康なのだ！」を持論にしている。脚を鍛えるためにはウォーキングやランニングも良いが、山歩きは平地歩きの何倍も効果的だと思う。片足型スクワットを何千回もやるのは無理だが、山なら知らず知らずにその効果がでる。日常的に階段を利用することなどは良策だと思うが、やはり、気分よく歩行寿命を延ばすためには、安全な山歩きをお勧めしたい。

（参考画像：きれいな花や蝶）

エゾノツガザクラ と チングルマ

レンゲショウマ

フジバカマとアサギマダラ

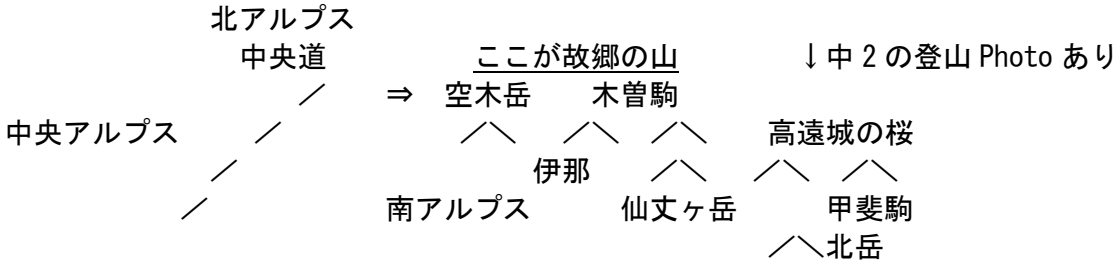
［講演の狙いと概要］…趣旨・補足
まず、日本一の山＝富士山。「なぜ山へ？」と聞かれると
「山が好き・好奇心を充たし、達成感が最高である」と答える。
山登りの傍ら、主に 歴史・神社等の Photo 撮影、健康増進 など楽しみ多い。
10 年前の作歌「 じいちゃんは どうして山に 登るのと 訊ねる幼なを 山に連れゆく 」

（山登り）魅力の１st＝ 風景
　⇒　山、太陽、富士山　……　紅葉、植物(ヒメサユリ)
　　↓　　登山道の側に並んで揺れている様＝ギャラリからゴルフ場で受ける拍手に似たり
　日本の 世界遺産の多くが 山 に関するもの

私の山暦
・長野県伊那市の出身／3000m 級百名山※の内４座…　木曽駒ヶ岳、空木岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳に囲まれている
　※ 3000m 超は 日本に全 21 座（なお木曽駒ヶ岳(2956m)、空木岳(2864m)、甲斐駒ヶ岳(2966m)、仙丈ヶ岳(3033m)）
・中２ ～ 大学 の間､友人の登山家と身近なものとして適宜の登山を続けていた(登山部所属ではなかったが)
・（東洋紡勤務(本社他)からの）退職後に、日本百名山（約 半分が残っていた）の制覇を再開（完登）した。
・さらに、兵庫百山・関西百名山 も完登。
・最近は、花の百名山・日本二百山 三百山の登頂を続けている（ ８７％を果たしている）
・海外で　4000m級以上を８座　＋　須磨毎朝登山 6,000 回 を達成している。

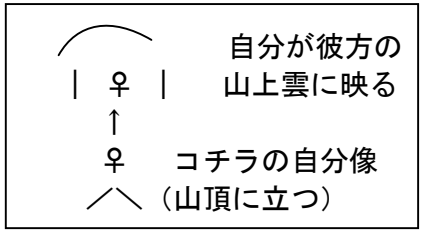
須磨アルプス…「スマ」＝ 摂津の「スミ」から（向こう側は播州からけさの朝焼け六甲-須磨山頂上からの Photo あり）

日本アルプスの概略



現役頃の山登り　⇒　職場仲間と盆休みなどに北アルプスへ…楽しみとして年１回程度　、50 歳以降にやまなべ会（　＝ 250 回超 ）
退職後の山登り　⇒　須磨-毎朝登山 ＋各種-山の会 、さらに　百名山～ （趣味として、内容・対象・場所　が拡がる）

日本人はいつから山登りしていたか　　神奈備山　　大神（オオミワサン）
・農耕（水源）＋狩猟　　＆ 神体・信仰
宗教家による開山　　↓
　富士・白山・立山・御嶽山←八百万の神（修験道）
更に　石鎚・大山・槍ヶ岳（播隆上人）　など
　　↓　　ex
　　大衆化　一方で　　神秘性　　**<u>ブロッケン現象</u>**



　更に
　・紅葉　　←　　火口
　・奇岩
　・柱状節理　←火口マグマの凝固過程で生成
神体山 登神
・三輪山　＝　大神神社 ＝大物主大神
・富士山　＝　浅間大社 ＝此花咲夜媛
・石鎚山　＝　石鎚神社 ＝金剛蔵王権現　　アズミゾク
・穂高山　＝　穂高神社 ＝穂高見神　　⇒　安曇族の神さま　　式年遷宮
　　里宮・奥宮・嶺宮
　修験道へ　　明神池　頂上
---　　（上高地の奥）
外国人から学んだ登山　＝　・アルピニズム

・アーネスト サトウ　　1862 年　日本の山歩き「日本アルプス」命名
　　内妻=武田カネ→次男＝武田久吉 日本山岳会を設立
・ウォルター ウェストン　1888 年来日　宣教師-上高地へ
　⇒　日本アルプスを海外に紹介（上条嘉門次と長く交流）
・アーサーヘスケス グルーム　1868 年　六甲山上を拓く（六甲ゴルフクラブ）
　⇒　六甲山を楽しみの場所として開発、ゴルフ・ウィスキーetc　←開祖の碑を 戦前に建立したが その後 陸軍が廃棄
　　市民の山 = 六甲山へ（須磨アルプスを含めて）

日本人の登山家
・藤木九三　RCC（岩登り愛好家グループ）を発足-芦屋「ロックガーデン」
・加藤文太郎　　単独行の登山家「孤高の人」(新田次郎著)モデル　　六甲全山縦走のスタート
・植村直己　　5大陸＋（南・北）極地の探検・踏破後、アラスカ マッキンリーで行方不明

ヤマでの楽しみ
・高山の「花々」　… 山の魅力（第２点目）
　　代表的には　　・レンゲショウマ　　・オオヤマレンゲ　　・ヤマシャクヤク
・「野鳥」（と植物）　…　・雷鳥　　・オコジョ　　・ニホンカモシカ
・「狼（ニホンオオカミ）」のこと　←　「益獣」でもある
・「高山蝶」　アサギマダラ　＝　1000km を旅する
　　ミヤマヒカゲ　＝　幼虫 2年越冬後に成虫へ　　← 田淵行男　記念館＝安曇野の写真美術館

外国の山に登る
・ネパール登山…「U 字谷」・「氷河　…　減少 顕著」
・キリマンジャロへの道　　さらに…　　各地（ヒマラヤ・アフリカ・南アメリカ　の各地の山々へ）

その他 あれこれ
・家族と（一緒に）行く百名山
・一人旅は落ち着ける
・一人行で足がすくんだ 「難所」　⇒　・戸隠-蟻の門渡り、・乾徳山(山梨県)の垂直壁、・八海山の岩峰、・大峰山奥駆け道-山上ケ岳
・富士山(頂上)の住所 ＝ 所在（帰属）がハッキリしていない　　（女人禁制・西の覗き）
　考え方＝「浅間神社」の所有(持ち物)　⇒　「山梨」・「駿河(静岡)」で争ったまま（「資産」の獲り合い）

【登山事故への警鐘】
１．徹底した判断力（集中力）を持つ・養う・使う
２．ネット経由の最新情報を つかむ・生かす
３．スマホで位置情報を得る（現在地・地形図 etc ）
４．「アカンときは」引き返せ！「尾根に」向かえ！ など
加えて　・ヘリに手を振るな（事故のモト、誤解救急のモト）
　　・家（の中）でケガしないこと　　以上